『西南アジア研究』No. 78, 2013

レバノン・ティールにおけるローマ時代のランプ編年

妹　尾　裕　介

は　じ　め　に

ランプは照明の一つの形態として，古くから使用されてきた。人々の生活に灯りを与える一方で，神殿における祭祀や葬送の儀礼にも頻繁に用いられてきたと考えられている。とくに地下墓においては，墓域が地下であるという性格からランプが葬送の儀礼に深く関わっていた可能性が高い。本論では古代のフェニキアにおいて重要都市であったティール（Tyre）に所在する，日本隊が発掘調査した地下墓 TJ10 より出土したランプについて分類および編年を試みる。こうした分析をつうじて，地中海の東岸部におけるローマ文化のありかたに一視点を投じたい。

ランプを製作する方法は遺物の観察によって推察することが可能である。本論であつかう2世紀から3世紀のランプは土製で，上面と底面にわけた型を使用してそれぞれの器形の型をとり，接合して完成させている。また，上面，底面の型の内側には文様がほどこされており，型をとる際に文様が粘土にうつされる。うつりが悪いときには，さらにうつされた文様をなぞることで明瞭にしている。ランプのなかには後部に把手がつくものがある。把手はランプの接合をしたあとに別作りで取り付けている。

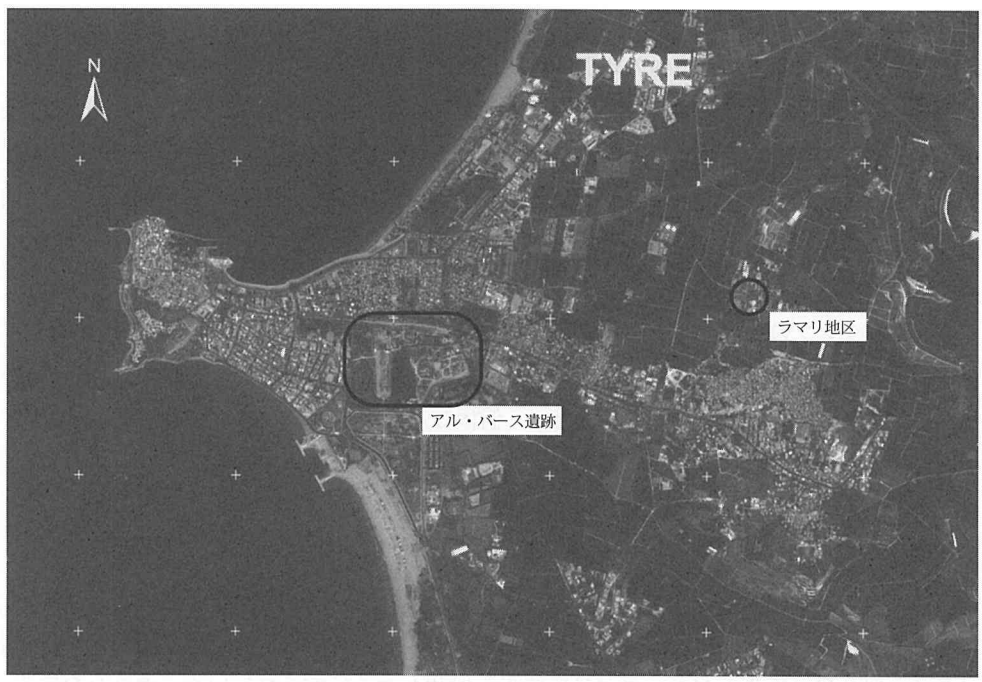
こうしたランプの製作する方法の想定から，ランプは火口部と体部の形状，文様が別々に存在しているわけではなく，型によって製作するためセットとなることが理解される。その一方で，把手については後からつけるため，個体ごとに差が生じる。よって，セット関係となる火口部と体部の形状や文様に着眼し分析することからランプの変遷を読み取っていく。

I　先行研究と課題

これまで多くの研究者がローマ文化を理解するために，考古学的な研究視点でローマ時代の遺物を取り扱ってきており，ランプに関する研究もそこに含まれている。そうした中で，とくにランプを重点的に研究したものとして，1914 年の Walters によってまとめられたランプカタログが挙げられる［Walters 1914］。このカタログではギリシャ，ローマにおけるランプの代表的な出土例が紹介されており，ローマ時代の中心的なランプについてうかがい知ることができる。1930 年代には，Broneer がコリント（Corinth）［Broneer 1930］，

Waageがアンティオキア（Antioch）のランプ研究をしており［Waage 1934］，これらの研究は今日におけるランプの研究方法の根幹をなしている。また近年では，1975年から1996年にかけて一連の研究がされたBaileyのランプカタログ［Bailey 1975-96］がもっともよくまとめられたものとして知られている。ランプ研究ではこれらを参考にすることが有効である。

本論であつかう日本隊が発掘調査したラマリ地区の地下墓TJ10は，レバノン国ティール市の東部に位置する丘陵上に立地する（図1）。このティール市におけるランプ研究はあまり活発ではないが，ティール市の西部に位置するアル・バース（Al-Baas）遺跡にあるアポロ（Apollo）神殿の調査報告書の中に，出土した遺物に関する報告があり，Marchandが出土ランプを詳述している［Marchand 1996］。この記述を参考にすることで，地下墓TJ10から出土したランプとの比較が可能である。アポロ神殿からは，イタリアで生産された典型的なローマ時代のランプと同型式のものが出土している[1)]が，日本隊がラマリ地区でおこなった地下墓の発掘調査では出土していない。こうした型式の違いからアル・バース遺跡とラマリ地区ではランプ文化が異なる可能性が示唆される。



（泉2006より引用，アル・バース遺跡の所在地のみ筆者加筆）

図1　ティール市におけるラマリ地区とアル・バース遺跡の所在地

1）　Marchand分類のGroup 3，group 4［Marchand 1996 : 58-64］。

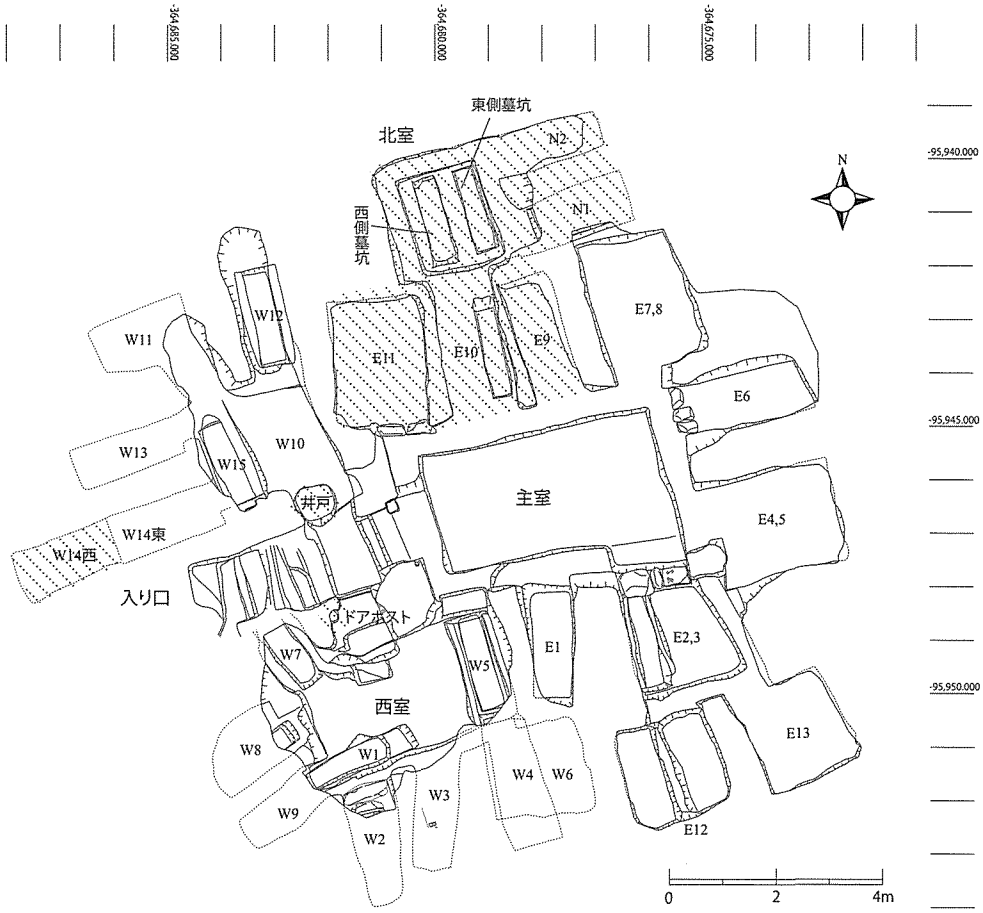
またアル・バース遺跡にみられる墓域は，ローマ文化が色濃く表出しており，装飾された石棺を使用している。対して，ラマリ地区の地下墓 TJ10 は良質な石灰岩を母岩とした丘陵をくりぬいて造成しており，陶棺や木棺が使用され墓制が大きく異なる。このような墓制の違いはティールにおける地域的な差を示している可能性が高い。したがって，本論では地下墓 TJ10 から出土したランプの考察によって編年を試みると同時に，アポロン神殿から出土したランプと比較検討する。ランプの考察からティールにおける墓制に関わる文化的な小地域差を明確にすることを目的としたい。

Ⅱ　遺　構　分　析

TJ10 からは，破片資料も含めると約 45 点のランプが出土している。ここでは遺構から出土している遺存状態の良いランプ 33 点について観察をし，その特徴を述べる。また，33 点のうち，火口部が残るものが 26 点ある。これらの火口部にはすべて煤が付着しており，出土したランプのおもな用途が地下墓内での実用的な灯りであったことがうかがえる。出土した位置にはかたよりがみられ，状態の良いランプは地下墓の北側に集中しており，とくに E10，E11，北室を中心に出土している（図 2)。これらの遺構は造成された時期に差がある。ランプの型式学的な検討をするに先立って，遺構の新古関係を把握することから変遷の方向を決定しておく。

遺構の配置から，TJ10 は主室の北側・東側・南側の面に複数の納体室をもつ構造が基本である。そののち，さらに納体室あるいは別室（北室や西室）を付け加えていき，現状の形へと拡張していったことが考えられる。よって主室に付属する E4～E9，E11 が初期の段階に造成された納体室である。これらの納体室は床面を掘りこむ墓壙をもたないという共通の特徴をもつ。一方であとに付け加えられた西室の大半には床面を掘りこんだ墓壙がともなっている。こうした納体室の形態の違いからも，E4～E9，E11 が初期の段階に造成されたものであることが推察される。

このようにして導き出した初期段階の遺構のうち，本論で対象としているのは E11 である。したがって E11 がもっとも古い。E10 は E9，E11 の間にあり両側の壁面が薄く，納体室が配置される間隔が他のものと比べて狭い。このことから，E10 は納体室ではなく北室を拡張するための通路として，追加で造成されたことが想定され E11 よりあたらしい。北室にある 2 つの床面を掘りこんだ墓壙は，北室床面全体を掘りこんだあと，さらにそれぞれの墓壙を掘りこんでいる。よってこれらの造成は同時期であり，遺物の時期が比較的に近いと考えられる。また北室の床面掘りこみ墓壙のつくられた状況から，当初から掘りこみ墓壙をつくるために北室が追加されたことが想定される。したがって北室を中心とする遺構の新古は，まず通路として E10 がつくられ，つぎに北室の床面の掘りこみ墓壙がつくられ，最後に通路をふさいでいる E10 にともなう床面の掘りこみ墓壙がつくられたという順序となる。



（＊網掛けはランプ出土地点）

図2　TJ10全体図

このような分析の結果から，遺構から出土したランプの時期幅について，つぎのように推定した（図3）。地下墓TJ10の使用期間が継続することは想定できないため，遺構別のランプの時期幅には重なりが考えられる。しかしながらE11，北室床面掘りこみ墓壙，E10床面掘りこみ墓壙は時期幅が比較的狭く，E10や北室から引き算することにより特定時期のランプが抽出可能である。こうしたランプの時期幅を検証した結果を踏まえたうえで，型式学的な検討を加えてランプの編年をおこなう。まず，分類の属性を提示し，それにしたがってTJ10で，ランプが出土した遺構ごとに出土したランプの特徴をみていく。

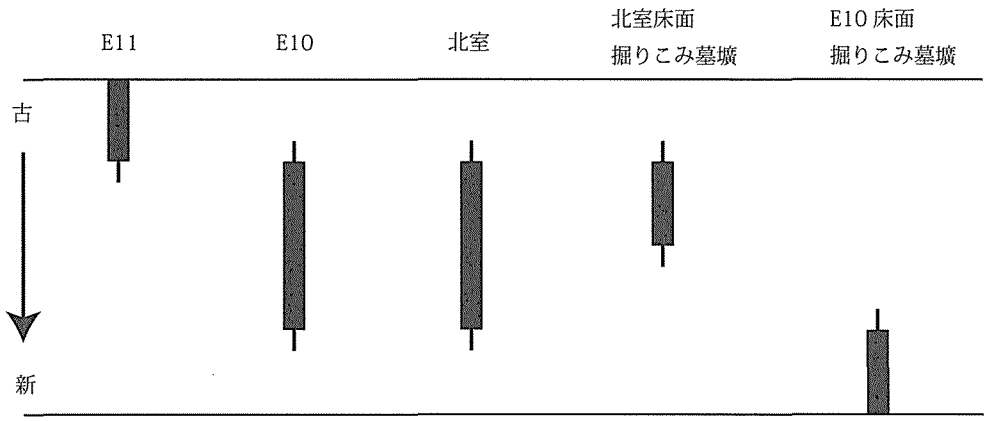


図3　遺構別出土ランプの時期幅推定

Ⅲ　遺　物　分　析

1　分類属性の提示（図4）

器形，体部前面文様，円盤区画帯，さらに把手の有無および取り付け方法を分類の属性とする。

器形は大きく火口部と体部に区分することが可能な【a 型】，火口部と体部に区分可能ではあるが体部に短い火口部がつく形となる【b 型】の２つにわける。このうち，a 型は火口部の形状によって，さらに，先端部が鋭角の三角形状となる【a1 型】，先端部が鈍角の三角形状となる【a2 型】，先端部がほぼ平坦になり火口部が四角形に近い形状となる【a3 型】，先端部が弧状となり丸みを帯びる【a4 型】の４つに細分する。

体部の前面にほどこされる文様は大きく，沈線によってほどこされる【沈線文】と浮線によってほどこされる【浮線文】にわける。沈線文は円文と直線文によって構成されており，円文があるかないかによって，火口部と体部に円文がつく【沈線文１類】，体部にのみ円文がつく【沈線文２類】，円文がつかない【沈線文３類】の３つにわける。さらに，１類は中央にほどこされる直線文の形状によって，両端が二股となる【沈線文 1a 類】，体部側のみ二股となる【沈線文 1b 類】の２つにわける。２類は体部側のみ二股となる【沈線文 2a 類】，両端とも二股にはならない【沈線文 2b 類】の２つにわける。３類は一本の直線文がほどこされるものと三本の直線文がほどこされるものがあるが各一例のため，細分しない。

浮線文は渦状の文様を主体としており，その形状から，連結した渦状の文様となる【浮線文１類】，円盤区画帯と連結した渦状の文様が対向している【浮線文２類】，「π」形をていし，先端部が渦状となる文様とその中に植物を表した文様をほどこす【浮線文３類】，１対の対向した，連結渦状の文様とその間に複数の沈線による直線文をほどこす【浮線文４類】の４つに細分する。

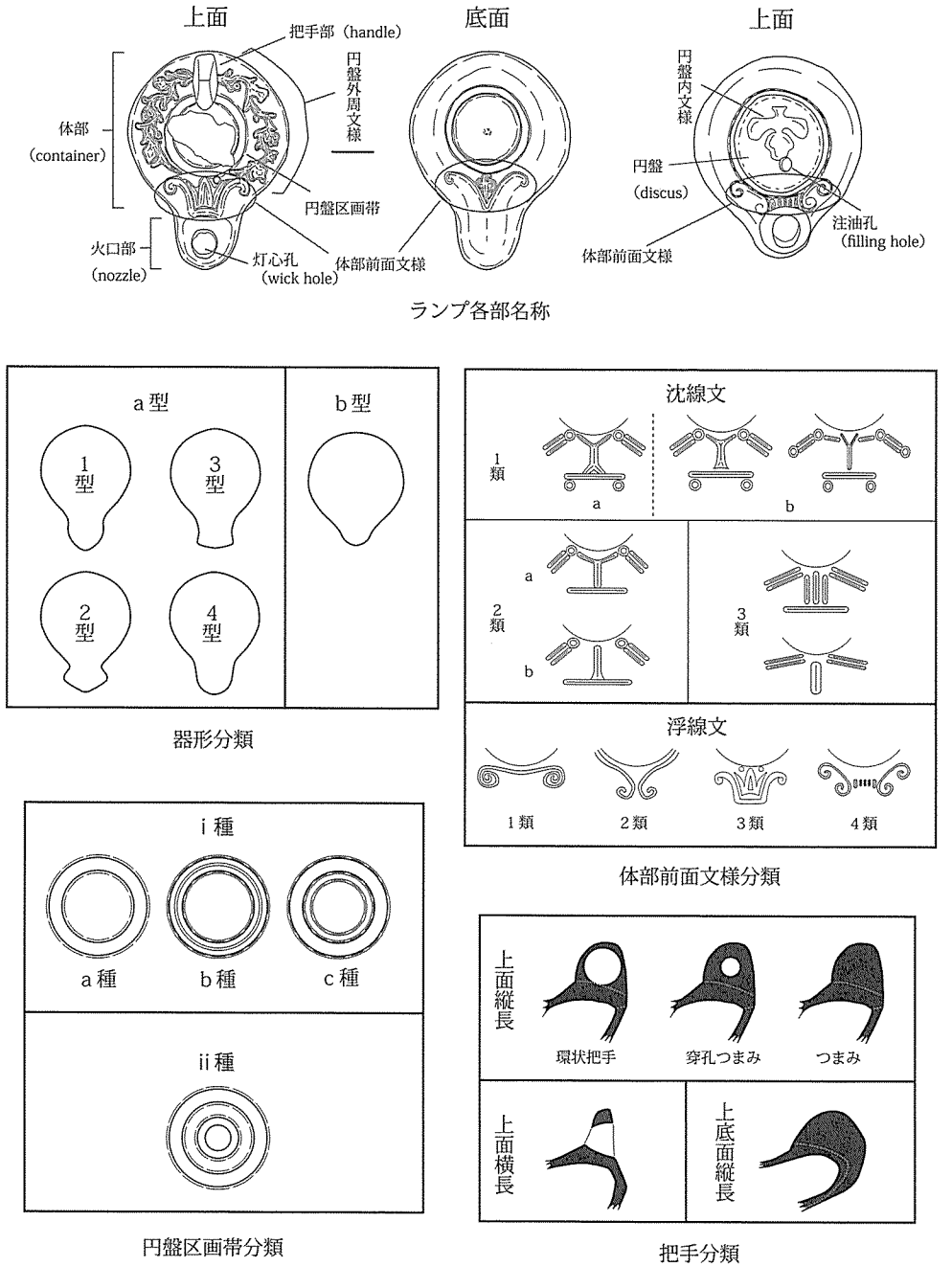


図4　ランプ各部名称と分類属性

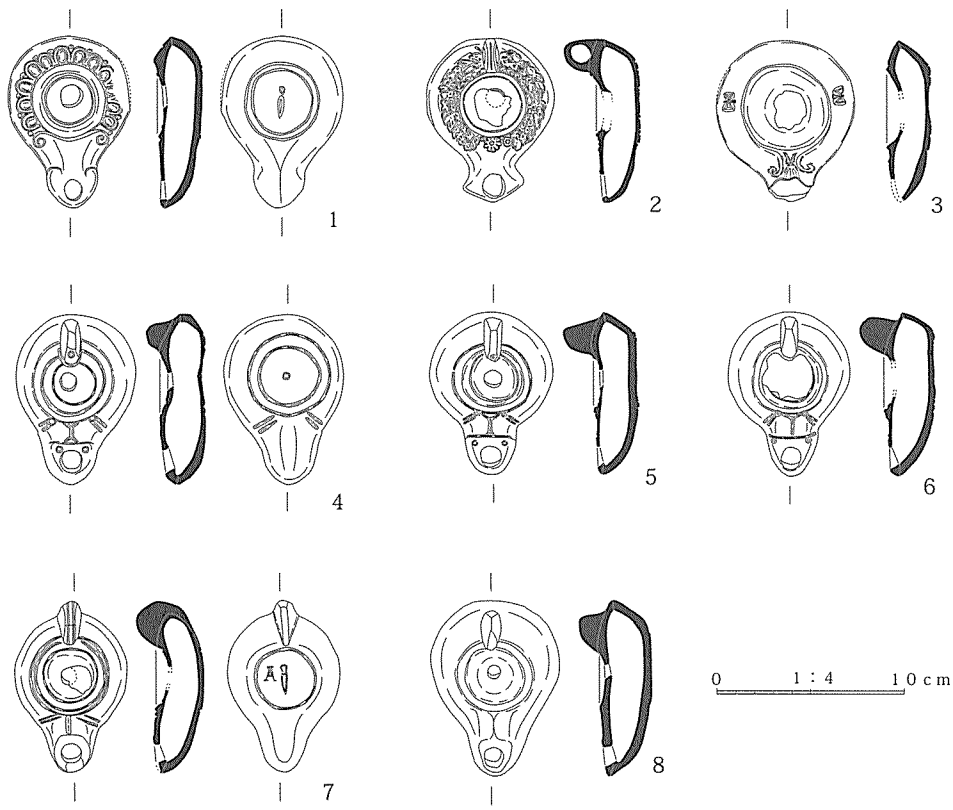
円盤区画帯は1つの浮線による円形文をもつ【i種】，2つの浮線による円形文をもつ【ii種】の2つにわける。さらに，i種は浮線による円形文のみをほどこす【i a種】，浮線による円形文の上に沈線をほどこす【i b種】，浮線による円形文の内周に沈線をめぐらす

【ｉｃ種】の３つに細分する。

把手は取り付ける位置と向きにより，上面につけられ縦長となる【上面縦長】，上面につけられ横長となる【上面横長】，上面から底面にかけてつけられ縦長となる【上底面縦長】の３つにわける。さらに，上面縦長は環状の把手になる【環状把手】，つまみ状となり焼成前に一方向から穿孔される【穿孔つまみ】，つまみ状で穿孔されない【つまみ】の３つに細分する。

2　E11 出土資料（図 5-1～4）

E11 からは４点出土している。１は，器形が a1 型，体部前面文様が浮線文１類，円盤区画帯がｉａ種である。火口部と体部の境界を明瞭にするえぐりがはいり，円盤の外周には卵形文（egg-pattern[2]）がめぐる。底面の円盤内には窯印（potter's mark）として燈火文[3]が



1～4：E11 出土資料　5～8：E10 出土資料　＊８は床面掘りこみ墓壙より出土

図５　E11 出土資料，E10 出土資料

2）“egg-pattern”［Walters 1914 : 146, No. 964］

3）ランプの底面には窯印がほどこされることが多く，これもその一つと考えられる。通常はスタン↗

きざまれる。2は，器形がa2型，円盤区画帯がｉａ種である。円盤の外周に対向した一対のブドウ木葉文（vine-leaf[4]）がめぐり，体部の全面にはロゼット（rosette）文をほどこす。把手は上面縦長の環状把手である。その上部には一条の沈線をひく。3は火口部が欠損し全体の器形はあきらかではない。体部前面文様が浮線文2類，円盤区画帯がｉａ種である。円盤の外周には円盤を挟んで向かいあった一対の両刃斧状文（double-axes[5]）がほどこされる。4は完形である。器形がa4型，体部前面文様が沈線文1a類，円盤区画帯がｉｃ種である。把手は上面縦長のつまみであり，その前面には円文がつく。底面には，体部前面に二条一対で直線状の沈線文，円盤内に円文をほどこす。

3 E10出土資料（図5-5～8）

E10からは4点出土しており，内1点は床面を掘りこんでつくられた墓壙からの出土である（図5-8）。

いずれも器形はa4型である。5は完形で，体部前面文様が沈線文1b類，円盤区画帯がｉｃ種である。把手は上面縦長のつまみであり，前面には円文がつく。6は5とほぼ同じような体部前面文様をほどこしており共通性が高い。つまみの前面には円文をもっていないが，それは把手が別作りのためにみられる個体差であると考えられる。円盤内は欠損しているため円盤区画帯はあきらかではない。7は体部前面文様が沈線文3類，円盤区画帯がｉｂ種である。火口部にある灯心孔の周辺が隆起している。把手は上底面縦長で，ランプの体部後面が把手部をなしている。また，把手の上面には二条の沈線をほどこす。底面の円盤内には沈線によって「A」の文字と灯りをあらわすと推測される燈火文が描かれており，窯印とみられる。8は表面の磨滅が激しく，体部前面文様の内容は不明である。円盤区画帯はｉａ種である。この1点のみ，E10内にある床面掘りこみ墓壙から出土した。他のランプとくらべて全体的に器厚があつい。把手は上面縦長のつまみを取りつけているが，粗雑なつくりである。

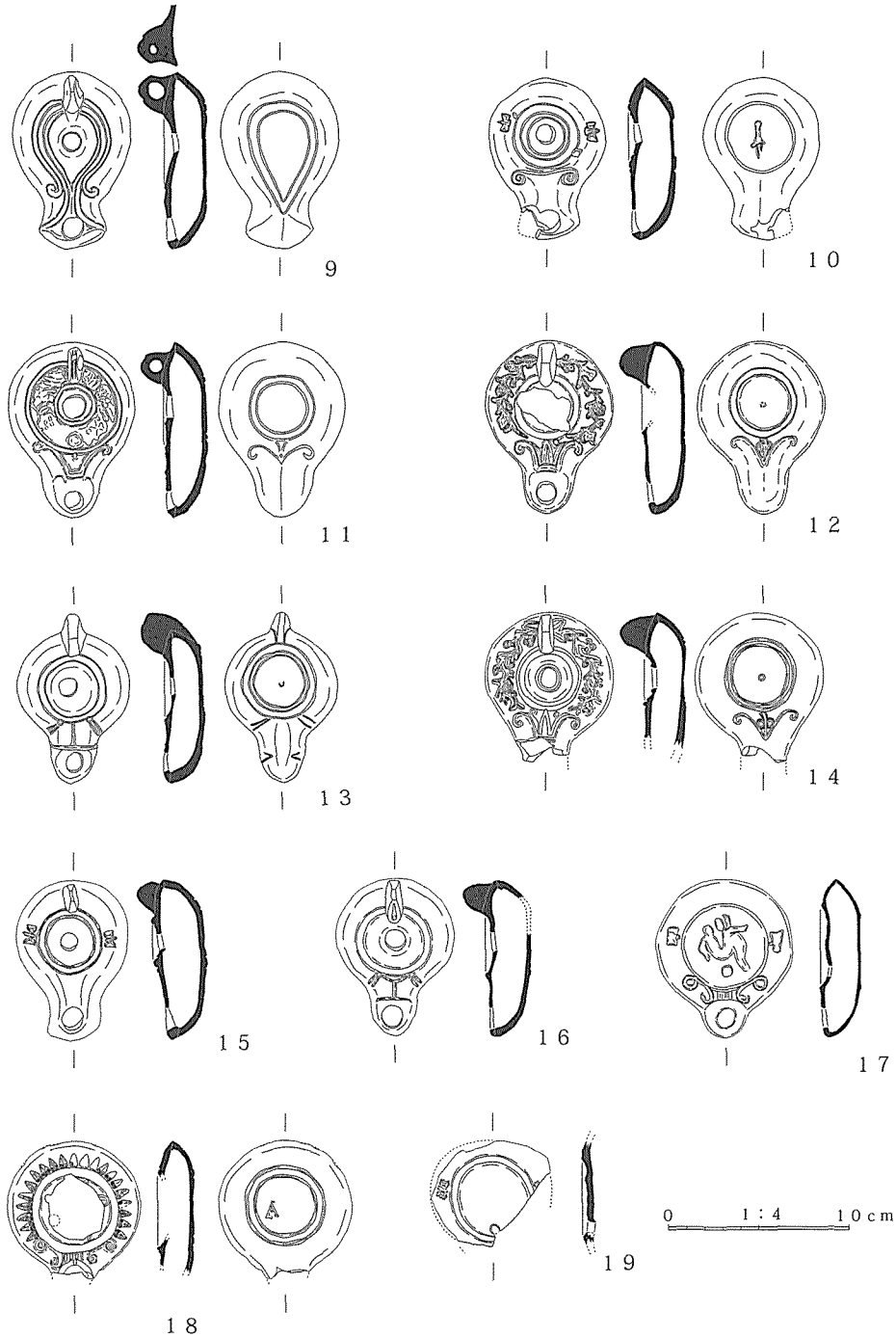
4 北室東側墓壙出土ランプ（図6-9～13）

北室からは23点が出土しており，TJ10から出土した全ランプの数の半数以上を占める。北室から出土したランプは，床面から出土したものと北室の床面を掘りこんでつくられた2つの墓壙より出土したものがある。また，床面を掘りこんでつくられた2つの墓壙は方角から，それぞれ東側墓壙，西側墓壙と呼称している。このように北室では，ランプが出土する場所が大きく3つにわかれ，床面より出土したランプと墓壙より出土したランプには時期差

↘ プによって窯印がつけられるが，この事例は沈線によって描かれる。同様の内容を表す可能性があるものとして，図5-7，図6-10がある。これらはトーチを表していると考えられ，ラマリ地区の墓制が火との関係が深い可能性がある。本論ではこの文様を燈火文と呼称する。

4）“vine-leaf”［Walters, H. B 1914 : 198, No. 1320］

5）“double-axes”［Wexler 1996 : 117, 118］



9～13：東側墓壙出土　14～19：西側墓壙出土

図6　北室掘りこみ墓壙出土資料

が考えられる。よって，出土した場所を区別して記述していく。

東側墓壙からは5点が出土した。9，10は器形がa3型である。9は体部前面文様が浮線文2類で，その間から伸びる浮線文は火口部とつながる。把手は上面縦長の穿孔つまみを取りつけているが，粗雑なつくりである。底面の円盤区画帯は体部の形状に沿って変形している。10は体部前面文様が浮線文1類，円盤区画帯がｉｃ種である。円盤の外周には円盤を挟んで向かいあった一対の両刃斧状文をほどこす。底面の円盤内には窯印として燈火文が描かれる。

11～13は器形a4型である。11，12は上底面のどちらの体部前面文様にも浮線文3類をほどこす。11の円盤区画帯はⅱ種で，把手は上面縦長の穿孔つまみであり，その上面に二条の沈線をひく。円盤区画帯の間には一対の対向した植物文がめぐり，磨滅のため不明瞭であるが，ブドウ木葉文の可能性が高い。12は円盤区画帯にｉａ種をほどこし，把手は上面縦長のつまみである。円盤の外周には，一対の対向した唐草文をめぐらせる。13は，体部前面文様が沈線文2b類，円盤区画帯がｉａ種である。把手は上底面縦長であり，E10出土の図5-7と同様である。底面には火口部に二対になったＶ字状の沈線，体部前面に二条一対の直線状の沈線が，円盤内には窯印として「C」の文字がほどこされる。

5　北室西側墓壙出土ランプ（図6-14～19）

西側墓壙からは6点出土した。14は火口部が欠損しているため器形があきらかでないが，図6-12と体部前面文様，円盤区画帯，円盤の外周にほどこされる文様が酷似している。また把手の接合や形状も同様であり同範の可能性が高い。15は器形がa3型である。体部前面文様はもたず，円盤区画帯はｉｂ種である。円盤の外周には円盤を挟んで向かいあった一対の両刃斧状文をほどこす。16は完形で，器形がa4型である。体部前面文様が沈線文2a類，円盤区画帯がｉａ種である。把手は上面縦長のつまみで，その前面には円文と三角形状文がつく。

17，18は器形がｂ型で，火口部にある灯心孔の周辺が隆起している。体部の円盤内にある注油孔は中心から大きくずれ，径も通常，中心にあるものと比較して小さい。体部前面文様に浮線文4類，円盤区画帯にｉａ種をほどこすが，17は円盤区画帯がかすかにある程度である。円盤の外周には円盤を挟んで向かいあった一対の両刃斧状文，円盤内にはエロティックモチーフ（erotic-motif）をほどこす。18は円盤の外周にブドウとその葉を記号化した文様として描く[6)]。円盤内にも文様があるが，欠損のため不明である。19は体部の上面のみが残存している。円盤区画帯はｉａ種である。磨滅が激しく円盤内の文様はあきらかではない。円盤の外周には円盤を挟んで向かいあった一対の両刃斧状文をほどこし，注油孔は

6）図6-18にみられるような文様は地中海東岸部一帯でよくみられるものであり，とくにイスラエルのテルアビブ（Tel Aviv）近郊に所在するアポロニア（Apollonia）から数多く見つかっている［Tal 2012：105, Figure 1］。

円盤前面に寄せられている。

6　北室床面出土ランプ（図 7-20～31）

床面からは 12 点出土した。20～23 は体部のみが残存しており，火口部の形状および体部前面文様はあきらかではない。20 は円盤部分が小さく，円盤区画帯をもたない。円盤の外周にはバラと考えられる植物文をほどこす。把手は欠損している。21 は円盤区画帯が i a 種である。円盤の外周には唐草文がほどこされるが，図 6-12，14 とは表現がことなってお

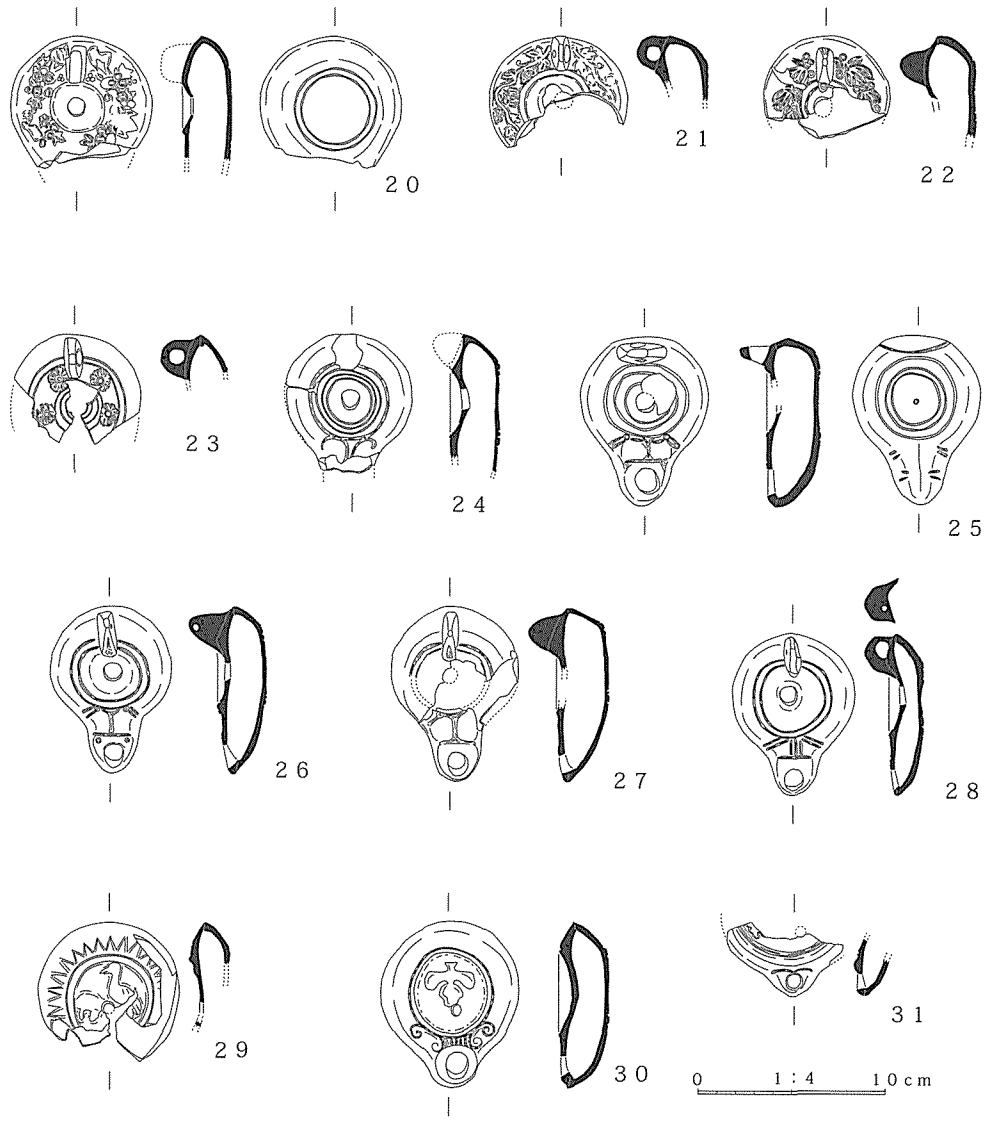


図 7　北室床面出土資料

り，ブドウの房が2つ残存している。把手は上面縦長の穿孔つまみである。22は円盤区画帯がｉａ種である。円盤の外周にはユリの花（lily flowers[7]）をほどこす。把手は，上面縦長のつまみである。23は円盤区画帯がii種で，円盤区画帯の間に複数のロゼット文が配置される。残存しているのは4つであるが，その間隔から5つ配していたと考えられる。把手は上面縦長の穿孔つまみである。

24は他に類似するものがない体部前面文様であるが欠損のため詳細はあきらかではない。円盤区画帯にｉｃ種をほどこす。把手は欠損している。25～28は器形がa4型である。25は，体部前面文様が沈線文1b類，円盤区画帯がｉｃ種である。把手は上面横長で穿孔している。底面の火口部および体部前面にも沈線文をほどこし，構成は第6図13に類似している。26は，体部前面文様が沈線文1b類，円盤区画帯がｉａ種である。把手は上面縦長の穿孔つまみで，その前面には円文と三角形状文をほどこす。27は，体部前面文様が沈線文2a類，円盤区画帯がｉａ種である。把手は上面縦長のつまみで，その前面に三角形状文をほどこす。28は，体部前面文様は沈線文3類，円盤区画帯はｉａ種である。把手は上面縦長の穿孔つまみをつけている。

29は体部のみが残存している。体部の円盤内にある注油孔は中心から大きくずれ，径も通常，中心にあるものと比較して小さい。円盤区画帯はｉａ種である。円盤の外周には鋸歯状文がほどこされる。円盤内には水鳥と考えられる鳥類と哺乳類と考えられる4足動物を描く。30は器形がｂ型で，火口部にある灯心孔の周辺が隆起している。体部の円盤内にある注油孔は中心から大きくずれ，径も通常，中心にあるものと比較して小さい。体部前面文様は浮線文4類，円盤区画帯はｉａ種である。円盤内は磨滅のため，文様等についてはあきらかではない。31は体部前面と火口部のみが残存している。火口部は短く，三角形を呈していて，器形はｂ型となることが推測される。体部前面文様をもたず，円盤区画帯にｉａ種をほどこすが他と比較してとくに径が大きく円盤が広大である。円盤内は残存状態が悪くあきらかではない。他のランプと比べて形態が異質であり搬入品の可能性がある。

Ⅳ　考　　察

1　ランプ群の設定（図8）

分類属性にしたがって分類したランプを，属性の組み合わせ結果（表1）でみると，ランプの器形と体部前面文様の相関を指摘することが可能である。そこで器形と体部前面文様が判明している個体を用いて，その組み合わせから次のA～D群の4つのランプ群にわける。

【A群】は器形がa1型～a3型のものである。このA群は火口部の形状が三角形状をていするものをまとめた。火口部と体部の区画として，えぐりがはいるa1型，くびれとなるa2

7）“lily-flowers”［Wexler 1996：117-118］

表1　属性分析結果

図	番号	出土遺構	器形	把手		上面				底面		群
						体部前面文様	円盤区画帯	円盤外周文様	円盤内文様	体部前面文様	円盤内文様	
図5	1	E11	a1型	無	—	浮線文1類	ⅰa種	卵形文	無	無	燈火文	A1群
	2		a2型	上面縦長	環状把手	ロゼット文	ⅰa種	ブドウ木葉文	無	無	無	A1群
	3		欠損	無	—	浮線文2類	ⅰa種	両刃斧状文	無	無	無	—
	4		a4型	上面縦長	つまみ	沈線文1a類	ⅰc種	無	無	沈線文	円文	B1群
	5	E10	a4型	上面縦長	つまみ	沈線文1b類	ⅰc種	無	無	無	無	B2群
	6		a4型	上面縦長	つまみ	沈線文1b類	ⅰc種	無	無	無	無	B2群
	7		a4型	上底面縦長	—	沈線文3類	ⅰb種	無	無	無	A燈火文	B5群
	8		a4型	上面縦長	つまみ	無	ⅰa種	無	欠損	無	無	B6群
図6	9	北室東側墓壙	a3型	上面縦長	穿孔つまみ	浮線文2類	—	無	無	無	無	A3群
	10		a3型	無	—	浮線文1類	ⅰc種	両刃斧状文	無	無	燈火文	A3群
	11		a4型	上面縦長	穿孔つまみ	浮線文3類	ⅱ種	区画帯間	ブドウ木葉文	浮線文3類	無	C2群
	12		a4型	上面縦長	つまみ	浮線文3類	ⅰa種	唐草文	(無)	浮線文3類	円文	C1群
	13		a4型	上底面縦長	—	沈線文2b類	ⅰa種	無	無	沈線文	C?	B4群
	14	北室西側墓壙	(a4型)	上面縦長	つまみ	浮施文2類	ⅰa種	唐草文	無	浮線文3類	円文	C1群
	15		a3型	上面縦長	つまみ	無	ⅰa種	両刃斧状文	無	無	無	A3群
	16		a4型	上面縦長	つまみ	沈線文2a類	ⅰa種	無	無	無	無	B3群
	17		b型	無	—	浮線文4類	ⅰa種	両刃斧状文	エロティックモチーフ	無	無	D群
	18		b型	無	—	浮線文4類	ⅰa種	ブドウ葉文	欠損	無	A	D群
	19		欠損	無	—	不明	ⅰa種	両刃斧状文	不明	欠損	欠損	D群
図7	20	北室床面	欠損	欠損	—	無	無	バラ文	無	無	無	—
	21		欠損	上面縦長	穿孔つまみ	欠損	ⅰa種	唐草文	無	欠損	欠損	C1群
	22		欠損	上面縦長	つまみ	欠損	ⅰa種	ユリ文	無	欠損	無	C1群
	23		欠損	上面縦長	つまみ	(浮線文3類)	ⅱ種	区画帯間	ロゼット文	欠損	無	C2群
	24		欠損	欠損	—	不明	ⅰc種	無	無	無	無	—
	25		a4型	上面横長	—	沈線文1b類	ⅰc種	無	無	沈線文	円文	B2群
	26		a4型	上面縦長	穿孔つまみ	沈線文1b類	ⅰa種	無	無	無	無	B2群
	27		a4型	上面縦長	つまみ	沈線文2a類	ⅰa種	無	無	無	無	B3群
	28		a4型	上面縦長	穿孔つまみ	沈線文3類	ⅰa種	無	無	無	無	B5群
	29		欠損	無	—	欠損	ⅰa種	鋸歯文	動物文	欠損	欠損	D群
	30		b型	無	—	浮線文4類	ⅰa種	無	不明	無	無	D群
	31		b型	不明	—	無	ⅰa種	無	欠損	欠損	欠損	D群

型から火口部と体部の区画が消失するa3型へと型式学的な変遷が想定される。よって，【A1群】(a1型，a2型)，【A2群】(a3型）の3つにわける。A1群は図5-1，2，A3群は図6-9，10，15が該当する。A群はさらに体部にほどこされる文様によって細分するべきであるが，出土点数が少なくまとまりが見いだせないため本論では保留した。

【B群】は器形がa4型で，体部前面文様に沈線文をほどこすものである。円盤区画帯は多種みられるが，円盤の外周および上面の円盤内に文様をもたない。個体差が少なく同様な文様構成をもつものが目立つ。他タイプとは違い把手がかならずつくが，上面縦長で，形骸化したつまみが取り付けられ，穿孔されるものが大半である。穿孔は通常の環状把手とは異な

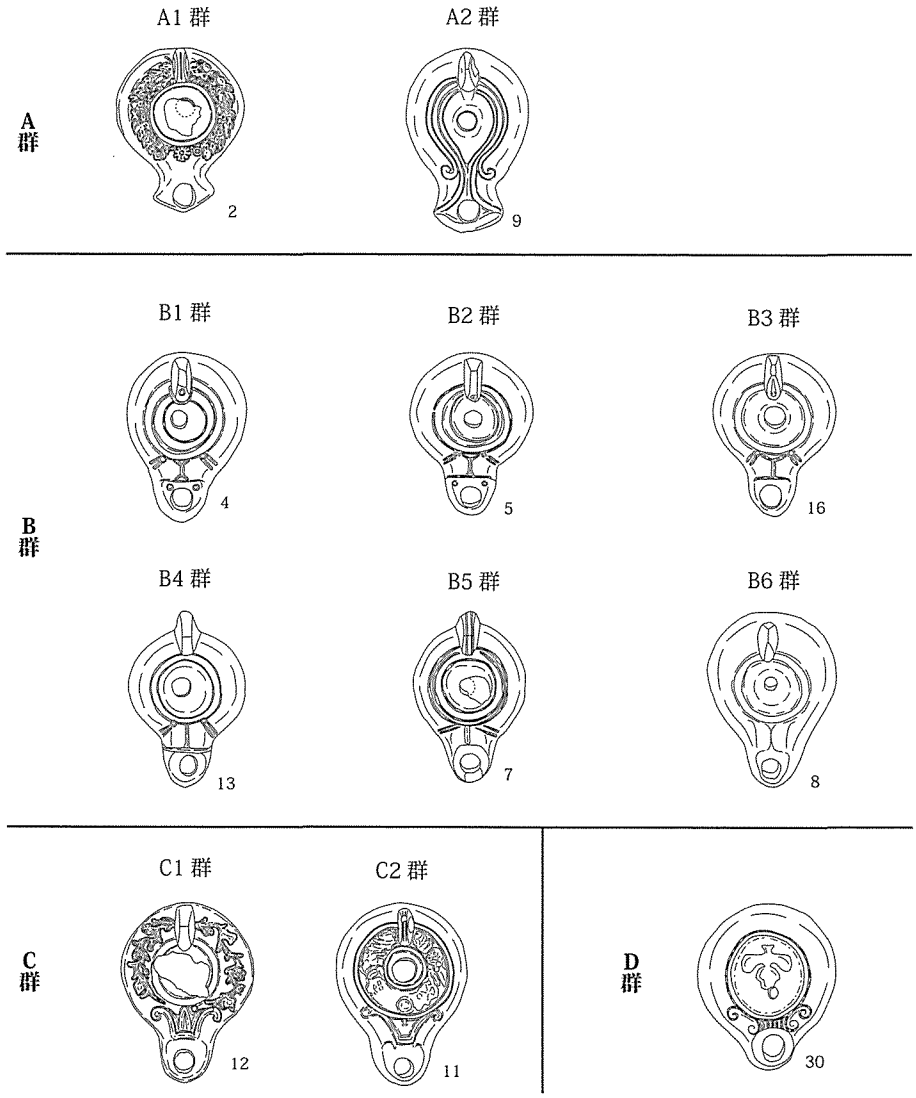


図8　ランプ群の設定

り，一方向からの焼成前穿孔で調整もほどこさず粗雑なつくりをしている。また，把手は後から取りつけるため，貼り付け位置，貼り付け方向は多種多様である。B 群を特徴づける体部前面文様の沈線文は分類の属性を設定した際に，円文が配置される位置と数，直線文にみられる両端の形状によって，沈線文 1 類～沈線文 3 類にわけた。この沈線文 1 類～沈線文 3 類には型式学的な変遷が想定され，1a 類，1b 類，2a 類，2b 類，3 類（あるいは，その逆）の変遷順序が考えられる。よって，それぞれを【B1 群】（1a 類），【B2 群】（1b 類），【B3 群】（2a 類），【B4 群】（2b 類），【B5 群】（3 類）とする。

また，図 5-8 は体部の前面には文様をもたないが，器形が a4 型，円盤の外周および上面

の円盤内に文様をもたず，上面縦長でつまみがつくという特徴の一致をもって，同じくB群に含め【B6群】として，B群は計6つにわける。B1群は図5-4が該当する。B2群は図5-5，6，図7-25，26が該当する。B3群は図6-16，図7-27が該当する。B4群は図6-13が該当する。図5-7，図7-28が該当する。B6群は図5-8が該当する。

【C群】は器形がa4型で，体部前面文様に浮線文3類をほどこすものである。上面の体部に装飾的な文様をもち，底面の体部前面にも文様をもつ。上面の体部に文様をほどこす位置から，円盤の外周に文様をもつ【C1群】，円盤区画帯の間に文様をもつ【C2群】の2つにわける。C1群は図6-12，14と図7-21，22が該当する。C2群は図6-11，図7-23が該当する。

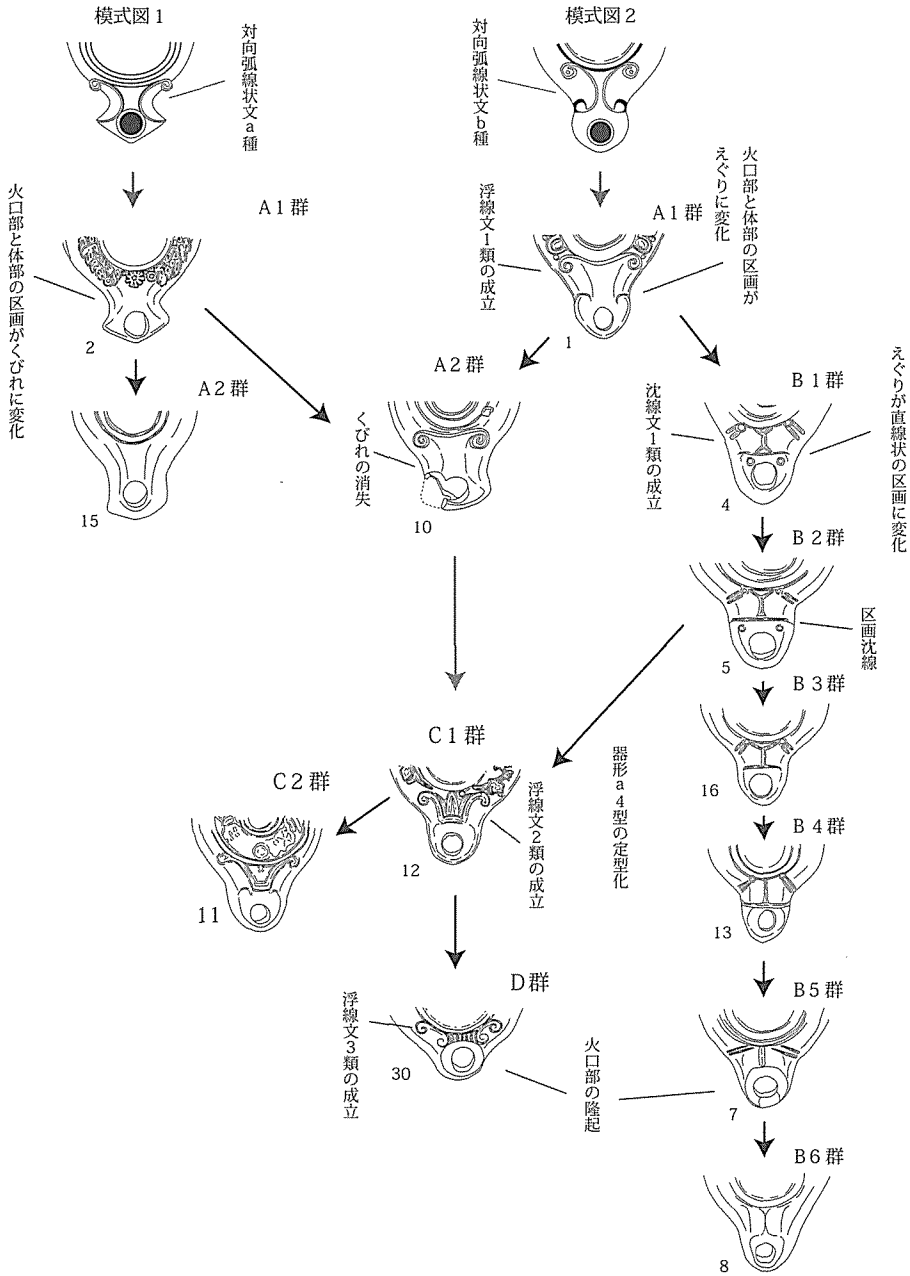
【D群】は器形がb型で，上面体部に文様をもつものである。この内，体部前面文様をもつものは浮線文4類をほどこす。円盤内の注油孔が中央ではなく端に寄せられ，他の群と比べて径が小さい。こうした特異な点から，D群は残存状態が悪くても円盤内の破片が残っていれば判別可能である。また，火口部にある灯心孔周辺を隆起させていることも特徴である。体部の前面にみられる文様があるかないかで，さらに細分することは可能だが残存状態の良い資料が少ないため細別はしない。図6-17～19と図7-29～31が該当する。

これらのランプ群の設定によりTJ10から出土したランプについて編年を試みる。

2　型式学的検討（図9）

TJ10から出土したランプの内，もっとも古い遺構と考えられるE11より出土した資料にはA1群に該当する1，2がある。これらは1世紀によくみられる火口部の先端形状が三角形を呈するものと類似しており，祖形がそれに求められるものである。また，1，2はアル・バース遺跡のアポロ神殿から出土したランプの内，1世紀に比定されたものと類似する（模式図1，2）。模式図1は火口部，体部の区画の文様として対向弧線状文a種をほどこす。2はくびれによって火口部と体部を区画している。模式図2は火口部，体部の区画を意識させる対向弧線状文b種をほどこす。1はえぐりによって火口部と体部と区画している。すなわち1世紀に盛行した火口部，体部の区画の文様であった対向弧線状文は1，2ではえぐりやくびれへと変化してしまい，消失しているのである。こうした対向弧線状文の型式学的な変化からA1群は模式図1，2より時期がくだることがわかる。また，1にみられる浮線文1類は，対向弧線状文b種の体部側にほどこされている渦状の文様が連結し成立したことがうかがえ，1の段階で対向弧線状文b種は解体し，あらたにえぐりと体部前面文様となることが想定される。

A2群とした10は火口部，体部区画としてのくびれが弱く，火口先端部が平坦になっていて，器形に着目すると2の火口部形状の崩れとして認識できる。また体部前面文様に着目すると浮線文1類をほどこし，1との共通性をうかがわせる。同じく火口部，体部区画としてのくびれが弱く，火口先端部が平坦になっている15は体部前面文様がない。2からの直接的な変化が読み取れる。こうした点から，対向弧線状文をもち三角形状の火口先端部をも



（模式図は Marchand 1996 を参照し模式化．模式図1は Group3，模式図2は Group4）

図9　型式学的変遷案

つもの（模式図1）からくびれをもち三角形状の火口先端部をもつもの（2）をへて，くびれが弱く火口先端部が平坦になるもの（10，15）へと変化していく変遷がえがける。

B群は1の浮線文1類が幾何学化し，沈線文に変化することで成立すると考えられる。ま

た，1にみられるえぐりも4では直線による火口部，体部の区画へと変化している。4，5の火口部には円文を配置しているが，これは1でみられるようなえぐり先端部の収めかたを円文で表現した可能性が考えられる。こうした型式学的な検討と遺構の新旧関係から，B群は複雑な文様構成から単純な文様構成への変遷が読み取れる。B1群はE11からしか出土しておらず，かつE11から出土したB群はB1群だけである。B2群はE10，北室床面から出土し，B3群，B4群は東西掘りこみ墓壙をふくめた北室から出土している。そして，B5群，B6群はE10からしか出土していない。B群の出土傾向と遺構の新旧関係（①E11の利用 ②E10，北室および北室内の東西掘りこみ墓壙の造成　③東西掘り込み墓壙の埋葬　④北室の利用停止　⑤E10内掘り込み墓造成）から，B1群からB5群への変遷過程は妥当といえる。

一方，浮線文系の体部前面文様の変遷は次のように想定される。浮線文系の体部前面文様は連結渦状文として成立し（浮線文1類），「π」形渦状文となり内部に充填文をもつようになり（浮線文2類），連結が分離して対向渦状文へという変遷過程が想定される（浮線文3類）。

C群は浮線文2類をもつことから浮線文1類との関連性がうかがえる。また，B群ランプの盛行により浮線文系の体部前面文様が影響を受け，火口部，体部の区画部分の全体をつかい横にひろがった文様であった浮線文1類から縦にひろがった浮線文2類への変化が指摘される。12は浮線文2類と円盤の外周に植物文様をもつC1群である。11は浮線文2類と円盤区画帯の間に植物文様をもつC2群である。C2群は円盤区画帯を2つもつことから型式学的にはC1群より少し時期がくだると考えられる。

D群は浮線文3類をもつことから浮線文2類との関連性がうかがえる。また，D群は器形b型になることが特徴的であり，体部に短い火口部がつく形状から器形a型と比較して器形が単純化されたものであることが指摘される。こうした器形の特徴が浮線文系の体部前面文様にも影響をあたえている。すなわち，浮線文2類で縦に展開していた文様が器形b型の成立によって火口部，体部の区画部分が消失した結果，ふたたび横に展開する文様構成である浮線文3類を成立させているのである。また，D群は火口部の隆起が特徴的である。こうした火口部の隆起はB5群にもみられるが，B群の中ではB5群にしかみられない特徴である。そのためD群との関係性が強いと考えられ，これらの時期が重なる可能性が高い。

3　ランプ編年案（図10）

遺構と各群の関係をふまえ，型式学的な検討から変遷を明らかにしたところで，TJ10から出土したランプの編年をおこなう。まず，TJ10の中でもっとも古いランプ群であるA1群を1期とする。このA1群からA2群とB1群，B2群へと変遷していくことが想定されるため，A2群とB1群，B2群を2期とする。この2期はA2群が細分される可能性やB1群，B2群にみられる型式学的な変化から前半と後半にわけるべきであるが，TJ10の遺構を踏まえた場合，細分はむずかしいため，本論の編年では2期として一括する。B3群，B4群およ

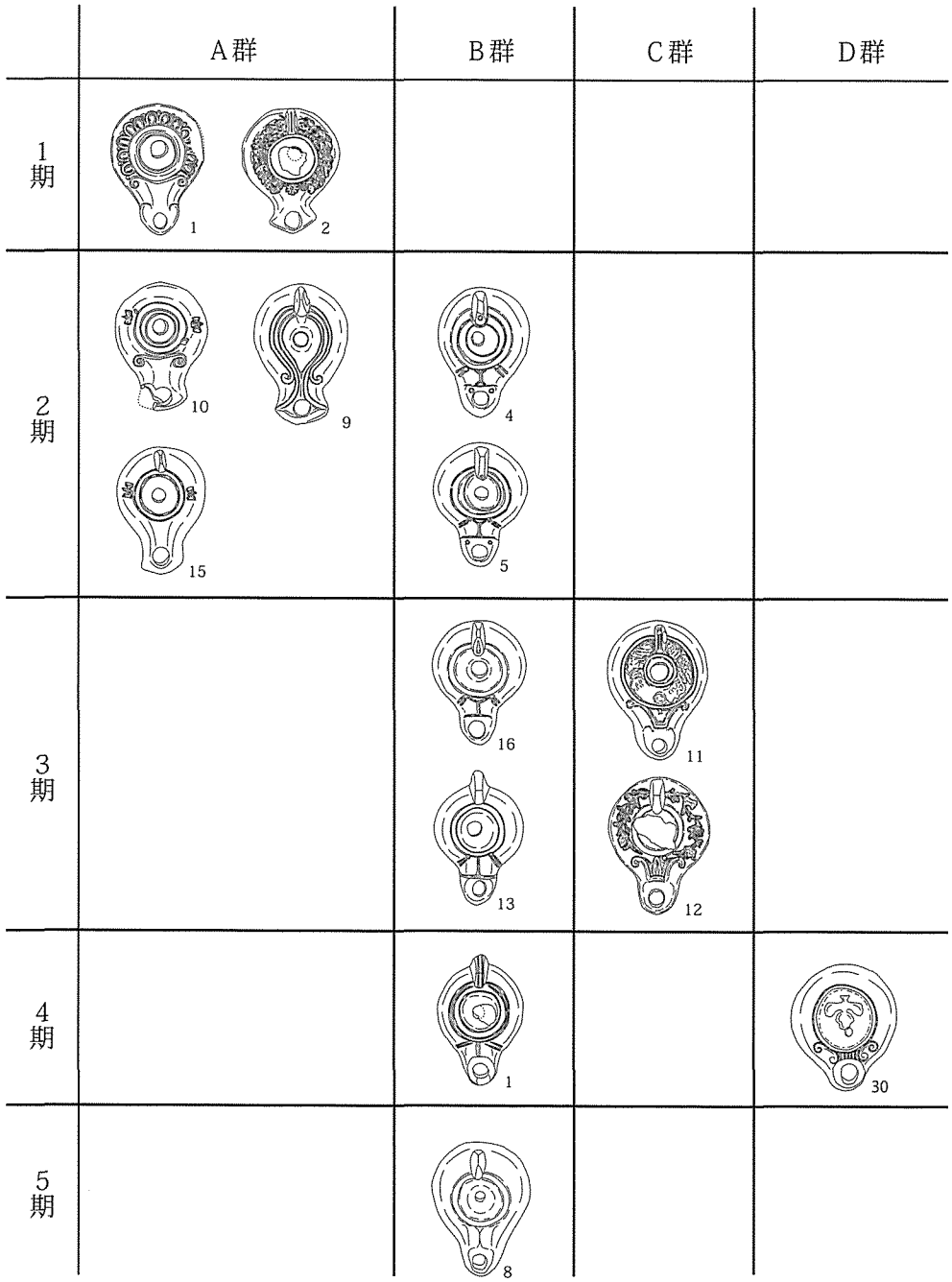


図10　ランプ編年案

びC群を3期とする。これらは北室の東西掘りこみ墓壙からは一緒に出土しており時期的に近いと考えられるため一括した。北室から出土した点数による影響も大きいが3期のランプがもっとも多種多様であり，TJ10において使用されたランプの点数が増える時期である。

D群，B5群を4期とする。D群は北室西側掘りこみ墓壙から出土しているが，E11および北室東側掘りこみ墓壙からは出土していない。こうした点から，D群は出土したランプの中で新相を示すと考えられる。また，B5群はD群と火口部が隆起するという特徴が一致する。そのため，D群，B5群を並行関係に置き，4期とする。B6群を5期とする。B6群は体部前面文様の消失しており，型式学的にB群の中でもっとも新しい。北室関係で最後に造成されたと考えられるE10内の掘りこみ墓壙より出土したものである。B6群はそのほかの遺構からは出土していない。本論であつかっているランプが出土した遺構の中でもっとも新しいE10内の掘りこみ墓壙から出土したことも踏まえて5期に位置づけた。

4　アル・バース遺跡アポロ神殿出土ランプとの比較検討

つぎにラマリ地区の特徴を明確にすることを目的に，TJ10で出土したランプとアル・バース遺跡のアポロ神殿から出土したランプを比較検討する。アポロ神殿から出土したランプの大半はおおむね1世紀後半～3世紀の間に置くことができる［Marchand 1996］。また，TJ10で出土したランプと特徴を同じくするランプが出土している。よって，アポロ神殿から出土したランプの年代を参考に，本論の編年案で設定した時期区分に実年代をあたえる。

本論の編年案における1期のA1群に該当するものはMarchand分類のGroup 6bである。Group 6bは円盤の外周に植物的な内容の文様がめぐるもので，火口部の先端形状が三角形を呈し環状把手をもつものを特徴とする。こうした特徴をもち，火口部，体部の区画を意識させる文様として，対向した弧線状文がほどこされているものは1世紀に盛行する特徴である（Group 4）。くびれやえぐりによって火口部，体部の区画されているGroup 6bはそれが形骸化したものといえ，1世紀後半に時期が比定されている。よって，1期を1世紀後半とする。

2期のB1群，B2群であるが，B群自体の特徴がMarchand分類のGroup 6aと一致する。Group 6aはHayes分類では「'Phoenician' derivative of the 'factory lamp' series」とされる［Hayes 1980 : p. 88］。本地域に特徴的なランプとして位置づけられ，時期は2世紀前半に比定されている。アポロ神殿から出土したランプはいずれも本論の分類ではB3群に位置づけられ，B1群，B2群は存在しない。また，TJ10ではE11から出土した資料が示すように，B1群は1世紀後半に時期比定したA1群と共出している。そのため，B1群はGroup 6aの中でも古相を示していると考えられる。また，2期にはA2群も含まれる。A2群は火口部の先端形状が平坦となっており，A1群から直接的な変遷過程が想定され時期的に連続する。したがって2期は1世紀末から2世紀初頭とするのが妥当であろう。

3期のB3群，B4群はGroup 6aに該当するため，2世紀前半に位置づける。同じく3期

のC群は2世紀前半に位置づけられているGroup 6cに該当する。Marchand分類のGroup 6cは火口部形状が丸みを帯び，つまみ状把手となる以外はGroup 6bと同じ特徴をもつとされる。また，HajjarによるとGroup 6bとGroup 6cには時期差があり，前者が古く後者が新しいとされる［Hajjar 1965］。こうしたGroup 6bとGroup 6cの新古関係は本稿の変遷観とも一致する。よって3期を2世紀前半とする。

4期のD群はMarchand分類のGroup 5bに該当する。Group 5bは円盤区画帯が明確で，広い円盤をもつ。円盤内に図像が描かれることが特徴であり，その内容は動物的なものが多い。円盤内にある注油口は図像を描く都合上により，中心から大きくずれ径が小さい。器形にも特徴があり円形の体部に短い火口部がつき火口部が隆起する。Group 5bはKennedy分類では「type 5」に該当する（Kennedy 1963, pp. 73-75）。時期は2世紀～3世紀と幅広い時期があてられているが，本稿では編年案の成果から2世紀後半に位置づける。同じく4期のB5群についても，B群の中で新相を示していると考えられるため2世紀後半とする。

5期のB6群についてはアポロ神殿出土ランプに類例がなく時期比定はできない。本論による型式学的な検討および編年案の成果から3世紀前半の時期を与えておく。

つぎに，TJ10から出土したランプの地域的特徴について考察する。TJ10から出土したランプはMarchandの分類にしたがうとGroup 5，Group 6しか出土していないことがわかる。一方で，アポロ神殿のランプは，出土したランプのGroup別の割合からみるとGroup 3，Group 4が約半数を占めている。したがって，TJ10から出土したランプとアポロ神殿から出土したランプでは主体的なランプ群に違いがみられる。

Group 3，Group 4は円形の体部に，先端部が三角となる火口部をもち，火口部，体部を対向した弧線状文によって区画し，円盤内に神獣が描かれることを特徴とする。また，Group 3，Group 4はイタリアで生産された典型的なローマ時代のランプ型式と同種のものである。この種のランプが出土することは，直接的なローマ文化の影響を地中海の東岸地域が受けていることの証拠にもなる。MarchandによるとGroup 3が1世紀に位置づけられ古相，Group 4が1世紀から2世紀初頭に位置づけられ新相を示すとされる。

これに対し，TJ10から出土したランプは約3分の1がB群である。すなわち，Marchand分類の中でも，とくにGroup 6aにかたよっているのである。Group 6aは地中海の東岸地域に特徴的なランプとしてすでに指摘されている［Hayes 1980 : 88］。アポロ神殿から出土したランプはGroup 6aにかたよることはない。よって，TJ10から出土したランプの傾向から，ラマリ地区に独自のランプ文化があったことが推察される。また，アル・バース遺跡には装飾石棺で構成される墓域のほかに，戦車競技場，アポロ神殿，凱旋門，水道橋といったギリシャ・ローマ文化の影響を強く受けた施設が存在する。一方，ラマリ地区ではアル・バース遺跡と墓制の異なる独自の地下墓が造成されている。こうした墓制の違いからもラマリ地区が独自の文化圏を形成していた可能性が高い。

さらに，アポロ神殿から出土したランプの半数を占めるGroup 3，Group 4は2世紀初頭

までのランプである。それ以降のGroup 5，Group 6になるとランプの数を減らす。対して，TJ10では1期のランプが少なからず存在するが，2期以降のランプが主体を占め，とくにB群が突出する。このようにアポロ神殿とTJ10において，出土したランプの主体的なランプ群の違い，墓制の違い，使用ランプの盛行時期の違いをふまえて，ティール全体を考えると1世紀にはローマの影響を強く受けていたが，2世紀に入り，独自のランプ文化が形成されていったことが想定されるのである。したがって，アポロ神殿とラマリ地区にみられるランプの出土傾向の違いは，当該地域における1世紀から2世紀にかけてのランプ文化の変化点を示唆している可能性が高い。

お　わ　り　に

本論では，TJ10から出土したランプを分析し，その考察によりローマ時代のランプ編年を示した。その上で，アル・バース遺跡にあるアポロ神殿から出土したランプと比較検討し，本論の編年案に実年代をあたえるとともに，ラマリ地区の地域的な特徴を浮き彫りにした。本論で用いたランプ群をアポロ神殿から出土したランプと照合すると，A群，C群，D群とB群という大きく2つの系統にわかれることが判明した。ラマリ地区におけるTJ10から出土したランプにみられるB群系統の盛行から，ラマリ地区ではランプにおいて文様系統の異なる独自の文化圏を形成していた可能性が指摘される。そして，TJ10の遺構ごとの出土傾向を考えると，北室への通路と考えられるE10からはB群しか出土しておらず，反対に北室の東西掘りこみ墓壙からは各1点ずつしか出土していない。こうした事実から，ラマリ地区の墓域に供給されていたB群のランプは使用目的も違っていた可能性が高い。すなわち副葬されるランプはローマ文化の影響がつよいA群，C群，D群であり，B群は副葬を目的としたものではないことが示唆される。

こうした考察結果から，ラマリ地区に展開していた地下墓は，ランプにみられる文様から独自のランプ文化の形成が読み取れ，またランプにみられた系統の違いが使用目的の違いを示す可能性を指摘した。そして，こうした独自のランプ文化の形成は2世紀を起点としていると考えられる。

本論では器形や文様を中心とした分析を進めた結果，型式学的な変遷観を提示し，ラマリ地区におけるランプ文化の一面をあきらかにした。しかしながら，ランプの製作における技術的な視点でみた胎土，色調については一切触れなかった。また，把手の接合方法の考察もしなかった。こうした視点は他の地域との比較にむけた，地中海全体でランプを考える際に重要である。今後の課題としたい。

［付記］本論を執筆する機会をくださいました泉拓良先生，ランプ研究についてご指導いただきました辻村純代先生にこの場を借りてお礼申し上げます。なお，本論は2008

年～2010年度科学研究費補助金（研究代表者 泉 拓良 基盤研究（A）課題番号20251007，研究課題名「フェニキア・カルタゴから見た古代の東地中海」）の成果の一部である。

参考文献

Bailey, D. M. (1975-96) *A Catalogue of Lamps in the British Museum*, British Museum, Cambridge.

Broneer, O. (1930) *Terracotta Lamps, Corinth, Results of Excavations 4(2)* The American School of Classical Studies at Athens, Cambridge.

Hajjar, J. (1965) Un Hypogée romain a Deb`aal dans la Région de Tyr, *Bulletin du Musée de Beyrouth* 18.

泉 拓良（編著）(2006)『レバノン・ティール遺跡での横穴墓・地下墓の発掘調査 平成14～16年度科学研究費補助金基盤研究（B）(2) 研究成果報告書』，京都大学文学研究科.

Hayes, J. W. (1980) Greek and Roman Clay Lamps, *Ancient Lamps in the Royal Ontario Museum* 1, ROM.

Kennedy, C. A. (1963) The Development of the Lamp in Palesine, *Berytus* 14.

Marchand, Jeannie (1996) The Lamps, *Tyre : The Shrine of Apollo*, Amman, Jordan, 57-67.

Sadurska, Anna (1976) *Les Lamps Palmyreniennes, Archeologia* 26 1975, Warszawa

Tal, O. & T. M. Bastos Intentionally Broken Discus Lamps from Roman Apollonia, *Tel Aviv* 39, Israel, 104-114.

Waage, F. O. (1934) *Lamps, Antioch-on-the-Orontes 1*, Princeton.

Walters, H. B. (1914) *Catalogue of the Greek and Roman lamps in the British museum*, British Museum, London.

Wexler, L. & G. Gilboa (1996) Oil Lamps of the Roman Period from Apollonia-Arsuf, *Tel Aviv* 23, Israel, 115-131.

（京都大学大学院文学研究科）